

時空間否認論と量子のリアリティー

森 川 亮

1：時間と空間への問い——はじめに

時間と空間についての問いは間違いなく第一級の哲学的問いを惹起する。と同時に、今日、この問いは、物理学理論の解釈にも通底する第一級の問いともなるのである。

一方、時間と空間はアナログ的な性質を有しており、空間についての議論は、時間について考察された論理をもとにして展開可能である。そこで、本論では、まず時間についての考察を行い、次に時間についての考察を空間について拡張することで時空間全般についての問題点を導出する。

まずは時間についてである。時間について考察する際に必ず言及されるのが、アウグスティヌスの以下のような言葉である。

「それでは時間とは何か」——「誰も私に問わなければ、私はそれを知っている。誰か問う者に説明しようとするれば、私はそれを知らないということを告白せねばならない」¹

このアウグスティヌスの言明は、時間の謎の本質をじつにうまく表現している。たしかにわれわれは、時間について知っているはずである。この時間感覚、あるいは時間観念なるものがなければ普通の生活を営むことなどまったくもって不可能になってしまうし、そもそもありとあらゆる事物の認識すら不可能となってしまうであろう。しかしながら、あらためて「時間とは何か？」と問われると、おおよそわれわれの誰一人として満足に答えられる者などいないのである。

カントは、こうした時間の不可解さを巧妙に避けるように自身の批判哲学を構築したと述べても過言ではない。中島義道によれば、カント的な時間とは、——言い

換えれば、カントがその考察の対象とした時間とは、『無前提の「時間」という概念一般ではない。それは、(意識に直接与えられた流れではなく)物質の運動を測定するような物理学的時間であり、現象とはそのような物理学的時間によって測定されるような現象である』のであり、すなわち、カントにとっての究明すべき時間とは運動学たる物理学に関連付けられた『測定能力としての時間』なのである²。

しかしながら、だからといって時間をただただカント的にのみ限定解釈することで問題が避けられるわけではない。カントは、思い切って単純化して述べてみれば、時間をニュートン的な絶対時間にのみ限定することで、ベルクソン流に述べれば時間を空間化することでこれをただの認識のフォーマットとしたのである。あるいは、そうした側面のみを採求するとしたのである。まさしくそれは、物理学や数学における横軸 t たる座標軸そのものである。

もっとも、カント哲学がニュートンの絶対時間とユークリッド空間を基盤に確立されたことは周知の事実である。カントによれば経験世界とは意識一般の形式としての時空間構造とカテゴリーによって形成されると考えられる。この時空間構造が絶対時間とユークリッド空間である。つまりカント的には、まずは無媒介的かつ無批判的に上記のような時空間構造が借定されたうえでその上部構造として形而上学があることになる。

ところが、二十世紀初頭に現れたアインシュタインの相対論によってカントがア・プリオリに借定した時空間構造は絶対的な地位を奪われる。それによって、カントの認識論である批判哲学はその普遍性を失ったとすら言われる。特に、量子論が勃興するに至って、これまでのニュートン的かつユークリッド的な時空間は、徹底的にその普遍性を失った。だが、それでもなお、カント流の、『時間と空間とは二つの認識源泉であって、そこからさまざまな総合的認識がア・プリオリに汲みとられうるのである』³ という方法論、さらに卑近な表現に言い替えれば、時空間は、様々に生じる現象をプロットするフォーマットであり、そのフォーマット上に置かれた現象をいかにして認識するのか、という認識論の建て方はどこまでも有効であると考えなくてはならない⁴。

相対論も量子論もかつての時間と空間の観念を根底からくつがえしてしまっ

た。特に、量子論はわれわれのありとあらゆる常識に真っ向から立ち向かい、ミステリアスな現象を開陳せしめる。しかし、このミステリーが、ミステリーたりうるのは、量子現象を既存の時空間概念で把握しようとするからである。量子現象は、そもそも通常われわれが抱く時空間概念では絶対に把握不可能なのである。この理論の描く世界においては、われわれが抱く素朴な時間と空間の概念はまったく通用しない。だからこそ、そのような現象を矛盾なく（言い替えればミステリアスではなく）認識可能ならしめる時間と空間に対する問いが誘発されてくるのである。つまりは、そのような現象を認識可能とする「時間とは何か」そして「空間とは何か」という問いである。かくしてわれわれは、科学の理論と現象をくぐり抜けて、再度あの第一級の問いの前に立たされることとなるのである。

本論はこれらの問いを射程に置きつつ、まずは、純粹に哲学的な考察を通常の時空間について行うだけでも、時間と事象との二者択一、空間と事象との二者択一に陥ることを示す。そして、時間と事象、空間と事象のそれぞれが、いわゆる相補的な関係にあることを確認し、この相補性をどのように解釈すべきかを論じることで上記した「時間とは何か」「空間とは何か」という問いに能う限り答えようとするものである。それは、哲学と科学が交差するポイントでもあり、かかるポイントに思惟を施すことは、本質的に量子論の解釈となるということを強く示唆することとなるであろう。ただし、本論は、哲学としての時空間否認論としてのみ読むことも可能であることを最初に記しておく。

2：マクタガートの時間否認論

まずは、時間否認論として有名なマクタガートの理論を概観して見ることから始めよう⁵。マクタガートは時間をA系列とB系列の二つに分ける。B系列は先後関係からのみ構成される時間順序であり、通常のカールト座標系の時間軸tに相当すると考えることができる。これに対しA系列は「過去」「現在」「未来」という3つの述語からなる時間統覚である。そしてこれらのうちでA系列の方がより時間にとっては本質的であるとマクタガートは述べる。そして彼は最終的に「過去」「現在」「未来」という述語が矛盾することをロジカルに導出することでA系列を

否認し、結果として時間はリアルではない、と述べる。すなわち、彼がその考察の最初の段階で述べる言葉を用いれば、

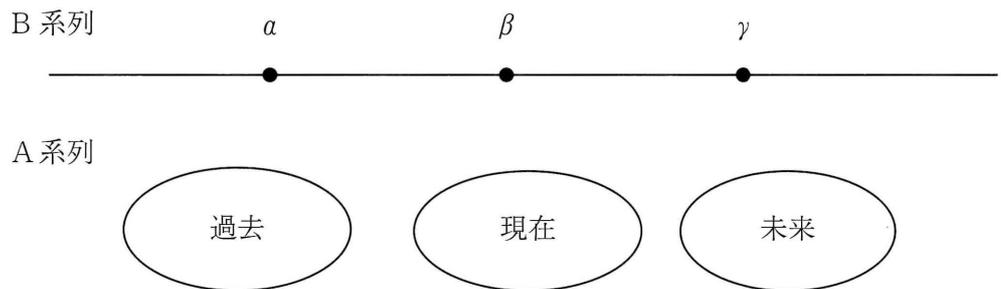
I believe that nothing that exists can be temporal, and that therefore time is unreal.

ということである。

では、具体的にマクタガートの議論をサマライズしてみる。

ある事象 E は時間軸上に固定されており、個々の事象の先後関係を変化させることはできない。例えば「黒船来航」という事象は、1853年7月8日であり、それが生じる前には未来であり、やがて現在になり、そして過去になる。1867年11月9日は徳川慶喜が大政を奉還した日で、これまたそれが生じる前にはそれは未来であり、やがて現在になり、そして過去になる。そして、これら二つの事象の先後関係を入れ替えることは不可能である。当たり前のことではあるが、このように事象は時間軸上に固定されていて動かない（これが時間の B 系列である）。

一方、時間の本質とは変化であり、もし B 系列のみでこの変化を描こうとすれば、ある特定の事象 E は突然事象 E であることを止め、他の事象に変化しなくてはならない（例えば、「黒船来航」という事象がどんどん変化していつかそれが「大政奉還」という事象にならなくてはならない）。しかし、そのようなことは不可能であり、かくして変化を描くためには A 系列が必用になる（図 1 を参照のこと）。



— (図 1) —

図1において α は β より時間的に前の事象で γ は後の事象である（左側が時間的に先とした）。では、現在である β がどのように過去になってゆくのか、つまり変化してゆくのかといえば、A系列と連動することで変化を記述することができる。つまり、A系列を右側にスライドさせれば β は過去になる。あるいはB系列を左側にスライドさせても同じことである。

以上までの議論は少なくともマクタガートの言説に従うかぎり、理解しやすくきわめて常識的でもあるように思われる。しかし、さらに進んでマクタガートは時間からリアリティーを奪い去り、時間を否認してしまう。この時間否認論を中島とダメット⁶の解説にしたがって以下にサマライズしてみよう。

今、1945年8月15日に玉音放送が行われて終戦となったことを事象Eとする。すると、1945年8月15日以前においてそれは未来であり、1945年8月15日においてかかる事象Eは現在である。しかしそれは2014年においては過去である。このあまりにも当たり前と思われる表記の中に矛盾が含まれている、とマクタガートは考えた。つまり、 $E = \text{「未来」}$ 、 $E = \text{「現在」}$ 、 $E = \text{「過去」}$ 、のいずれの等式も真である。故にマクタガートはこのような述語、過去、現在、未来はリアルではない、としたのである。Eは同一のはずであるから、イコールで等値された右辺を偽とするのである。かくして、そのような述語から成る時間のA系列はリアルではない、ということになって時間にとって本質的であるA系列がリアルでないのであれば、そもそも時間は存在しない、と結論せざるをえない（すなわち、時間はアンリアルである）。

以上がマクタガートの時間否認論の骨格である。

3：大森の事象否認論——大森時間論

マクタガートの議論はまさしく上記した三つの等式の右辺を「偽」としたのであった。これに対して大森は左辺すなわち事象からリアリティーを奪うことでこの論理的矛盾を回避しようとした、と述べることができる⁷。

大森時間論⁸は事象を夢幻^{ゆめまぼろし}のただ中に追いやってゆくという特徴を持つ。過去の事象はいかなるものであれ今現在それを想起しているという意味において他ならぬ現在であり、未来も同様である（未来の場合はそれを現在において想像してい

る)。10年前の写真は10年前のその瞬間ではなく10年前の写真を見ているということからして今現在である。この一見すると時間否認とも思われる論理展開において大森は時間の今現在性に徹底したリアリティーを見いだすことで時間も事象もすべてを否認することからギリギリのところまで逃れている。つまり大森の述べる「原生時間」という概念である。すなわち時間は、今現在、まさしくその今現在性を持ち、過去も未来も現前している事物の中に含まれつつ、事物のただ中にいわば叩き込まれるようにして存在している。これが大森の述べる原生時間である。存在物は、今現在そこに存在することをもって、その過去も、その未来をもそこに含まれているというのである。ただし、繰り返すが、存在物の過去の存在性（存在可能性）も未来の存在性（存在可能性）も、上記のごとく^{ゆめまぼろし}夢幻である。こうした事態を大森は「存在のときめき」とも呼び、道元の「有時」とも重ねあわせて述べている。

これは、「色即是空の实在論」、あるいは「生々流転の实在論」、と称すべき实在論でもあろう⁹。なぜならば、大森時間論は存在と時間を切り離さず、存在（そしてひろく事象一般）は時間的な生々流転のただ中に实在し、悠久の時間の中から（あるいはその中に）形をなし、そしてまたその中へと滅してゆくからである。ただ漠たる時間のみが、あたかもすべてを飲み込む大海であるかのようにそこにある。かくして、大森はきわめて仏教的な实在概念へとマクタガートとほぼ同じロジックからたどり着いたのであった。しかしながら大森は時間を死守せんがために事象を葬り去ってしまった。

大森は、そもそも過去とは現在において製作されたものだ、と述べる。絶対的な過去の否定である。彼の論法からは我々が絶対的にあったと信じる過去の諸々の事象もただ「多数決」（多くの人が、「過去にそのようなことがあった」と信じているという意味において）と「現在との接続性」（過去から現在へ至る一貫性・連続性）からのみ現在において作成されるものとなる。もっとも、本当に過去とはそのようなものなのか、という疑問が残り続けることは確かであり、ここに大森の限界があったと言えるではあろう。しかしながら、大森のこの言説はおいそれと否定できない論理性と情感を有している。過去はいかなる意味においても消え去ってしまったのである。

それにしても、いささか学術論文らしからぬ印象論ではあるが、この大森の時間論、あえて述べれば大森過去論は、少なくとも日本人にとっては了解しやすいものではなかろうか。過去は夢^{ゆめまぼろし}・幻であり、未来も幻の彼方にある。いや、それどころか、大森に言わせれば現在すらも夢^{ゆめまぼろし}・幻なのである。なぜならば、今現在という時間を捉えた瞬間にそれはすでに過去となってしまうが、かといって、この今の幅をどんどん狭めていって幅のない数学的点（あるいは表面）となった途端に世界は消滅してしまうからである。大森の言葉をそのまま述べれば、「ヨウカンの表面にヨウカンはない」のである。かくして、ただ時間だけが、流れるようなものでもなく、過ぎ去るようなものでもなく、ただ事物に叩き込まれるようにして有る、のである。こうした理解の根底に極めて日本的で仏教的な自然観や人生観があることはほとんど確実であろう。

これに対して、マクタガートのそれは、クリヤーな過去、あるいは未だ存在してはいないが、厳然として彼方にある未来であって、それは文字通り「有る」、のである（だが、明確に時間がないのである）。カントの時間論¹⁰にあっても、じつはこのマクタガートの結論とさしてかけ離れたものではない。カントは、時間とは内的直観の現実的形式であり、それゆえに内的経験に関する主観的・経験的実在性については承認するが、その絶対的な超越論的実在性については、これを拒否している。カントにとっての時間とは結局のところ、われわれの内的直観の形式にすぎず、対象を直観する主観に結びついている、言ってみればインデックスにすぎないものなのである。ここから、マクタガートの先鋭的な結論へはほとんどあと数歩というほどに近いものであり、両者は共に時間否認論の系譜で繋がるのである。

いずれにせよ、マクタガートの結論も大森の結論も論理的にはおいそれと反駁し難い堅固さを有している。しかし、両者共にどうにもグロテスクであり、奇妙な世界を提示していることだけは確かである。ところが、以下でこの論理を空間へと拡張した時にわれわれは、もっと不可思議でグロテスクな世界に遭遇することとなる。

4：空間否認論

マクタガートと大森の時間論は、いわば「事象か時間か」という二者択一を迫られた結果のように解することが可能であった。そして、両者共に、それなりの説得力を有しており、その論理に入り込むと簡単には反駁できない。ところが、ここにさらに深刻なパラドクスを示すことにしよう。上記したマクタガートと大森の論理展開をそのまま空間と事象の関係に用いるのである。

メロ¹¹はマクタガートの議論と結論を批判的に議論してゆくなかで、「空間についての A-place、B-place」というものを導入する。

B-place とは緯度・経度のようなものでいわばデカルト座標系である。日本標準時明石市は東経 135 度である。という言葉は B-place 表現であり、座標系を変化させないかぎり固定されている。また、座標系をいかに変化させようとも東京と大阪の位置関係が変化することはない（もちろん長い間の地殻変動は考慮に入っていない）。このような意味で場所はマクタガートが例に出す時間軸上の（つまり B 系列上の）事象に相当する。これに対し、A-place とは東西南北、上下、左右、あるいは「ここ」「あそこ」「むこう」といった述語で示される空間である。これは固定されていない。セスナ機はジェット機の「下」を飛ぶが、セスナ機は自動車の「上」を飛ぶ。左右は人間が向きを変えれば容易に逆転し、東西南北も容易に変化する。例えばケンブリッジはロンドンの北だが、ケンブリッジはエジンバラの南である。そしてこれら A、B 両方を同時に用いなくては正確に空間を示して認識することは不可能である。例えばロンドンから西へ（A-place）約 9000 キロメートル（B-place）である、という言葉表である。

ところで、マクタガートは、時間にとって A 系列こそが本質的であるとした。それは、時間にとって本質である変化を描くことができるからであるが、空間についてはどのように言えるだろうか？

B 論者（マクタガートのように A が本質的であると考えのではなく、固定化された B が本質的であると考え論者）たるメロの論によれば、固定されている Bこそが本質的であるが、これは議論の分かれるところである。まず、空間を認識するに本質的なことは、離隔の認識であり、その離隔の程度、すなわち距離が具体

的にどの程度かということはその次に認識することである。つまり、まずは、「ここ」「あそこ」「むこう」や上下左右、東西南北といった方位・方向指示語に従うように身の回りの空間を認識するのが最初なのだ。つまり、さらに卑近な言い方をすれば、空間にとって本質的なものは、「広がり＝離隔」であり、こうした「広がり＝離隔」を認めて、この次に固定的な距離や配置を具体的なそれとして認め得るのである。いや、そのような広がりがあるところには配置し得ない。広がりがあるから（広がりがあるから）配置可能なのであり、配置することで空間的広がりが突如として出現するのでは断じてない。

しかしながら、こうした方位・方向指示語（あるいは空間指示語）たる A が空間配置関係 B に先んじていて本質的であることが不明瞭になってしまうのは、空間は時間よりもより具体的だからである。空間は、時間とは違って想念の世界にあるのではなく、われわれの五感でもって具体的に認識することが可能なのである。言い替えれば、空間は身体性を基にして認識されるようなものだからである。もっと率直に述べれば、眼に見えて広がりがあり、その広がりの中に様々なモノが配置されていることをリアルに認識できるからである。だが、この身体性を奪って、例えばブラックボックスの中に人を閉じ込めてしまえば、人は一切の B 基準を見失いその結果、空間の B 認識は霧散してしまうであろう（わずかに残っている B 認識はブラックボックスの中の直接に知覚できる空間だけである）。しかし、そのような状態であったとしても、人はやがてそのブラックボックスの中からブラックボックス外の空間についての A-place を様々な方法でもってゆっくりと構築してゆくことができるはずである（例えば、いつも同じ面側から物音が聞こえるとか、あるいは、このブラックボックスが屋外に置かれていたら朝日が当たって暖くなる面がどちらかとか……、等々といった些細なことから外部を推測して構築してゆくはずである）。そして、A-place が構築された後でブラックボックス外についての距離や配置といった B-place も構築するだろう。すなわち、空間についてもやはり、A-place がより本質的、あえて述べれば始原的なのである。

さて、上記を踏まえて空間について考えるのであるが、空間と事象の関係のみを

ろう。)

さて、かくしてマクタガートの議論と同様の二者択一に陥った。マクタガートに従うなら「むこう」「ここ」、あるいは東西南北や左右、そして上下といった空間指示語はリアルではない。そして一般化して空間の A-place はリアルではない。よって空間はリアルではない（あるいはもっとどぎつく空間は存在しない）、と述べなくてはならない¹²。しかし論理的には左辺の「東京」という事象に相当するものを疑うこともできるのである。（都市のリアリティーまで奪ってしまったような格好になったが、ここで論じたいことは事象である。ある事象 E が東京で起こっていたとして、かかる事象 E はむこうであり、且つここである、と述べる冗長さからここでは単に都市名を用いたと理解されたい。）

かくして、マクタガートの論理を突き詰めてゆくと、時間も空間も否認されてしまう。また、大森流に事象を否認して時間と空間のみを、しかも、空間に関してはわれわれが観測できる領域のみの空間だけを是認することになる。これは、先のセクションで原生時間や存在のときめき、あるいは有時、として述べたことの空間版である。すなわち、大森ならば、「原生空間」とでも名付けたであろう、そこから空間が出現する、あるいは派生するような「有空」（本当は、「有間」あるいは「有域」、「有広」と述べるべきなのかもしれない）なる空間である。

5：時空間と事象の相補性

量子論の数々のパラドクスは、すべて不確定性と相補性から派生する現象である。そして両者は根本的に同じことの別表現である。不確定性は、マイクロ対象の波動性を見るか粒子性を見ようとするかに関する限界設定であって、これを量的に表したものである。すなわち、より本質的なことは、マイクロ対象には波動—粒子の相補的關係性（補完性）があるということである。

一方、量子論の不可思議さをドラスティックに示すものとして、「月は見ていない時に存在しているかいないか？」という問いかけがある。この答えは、量子論の標準解釈に従う限り、「月は見ていない時には、見ていない空間に可能性の重ね合わせとしてある」、というものである。量子論の標準解釈であるコペンハーゲン解釈によれば、対象は観測しなければ存在たりえない。言い替えれば、観測によって

対象は確固たる存在として現象するのである。

ここで述べた量子論に特徴的な性質が、奇妙にも、そして驚くほど上記してきた時間と空間、そしてそれらと事象との関係とパラレルであることに驚かされる。マクタガートと大森は図らずも時間と事象が互いに相補的な関係性にあることを示しているし、大森の論理を拡張することで導出された、事象を否認して空間を是認する結論は、量子論の観測のパラドクスそのものである。そして、ここにも空間と事象の相補性が出現している。時空間と事象とはなべて相補的な関係性を有すると結論せざるを得ない。

かくして、ここで新たなる問いが出現する。つまり、われわれは、時空間と事象を相補的に理解し、それぞれのリアリティーをそのようなものとして了解しているのだろうか、もしくは、そのように了解すべきなのか、という問いである。コペンハーゲン解釈に従えば、そのように了解すべきである、との回答が得られる。だが、さらに一段、あるいは数段深い層においてリアリティーは担保されているのではないか、といういわば常識的な疑念がわき起こってくることは自然であろう。

われわれは、深層から射す光の影を時空間というフォーマットに映すことのでかかる深層のリアリティーを認識しているのではなかろうか？ このように考えてみると、本論で論じてきた時間と空間は（ということは、われわれが抱く常識的な時空間概念は）、そうしたリアリティーを映すいわばプラトンの洞窟の壁に相当するスクリーンにすぎないものであると解釈できる。このように解釈しても、時間と空間をカント流に認識をなすための枠組みとして解し、その上部構造に形而上学を構築しようとする指向とは矛盾しない。それどころか、カントによれば、時空間の向こう側に物自体が借定されるのであってみれば、さらに体系的・論理構成的疎通性が見いだされる。事実、カッシーラーは、概ねこうした論理構成の相似性から現代物理学＝量子論におけるカントの認識論の意義を見だしこれを擁護したのであった¹³。

6：深層に張られた理論

量子論の非標準解釈として非局所的な隠れた変数理論＝ボーム理論というものがある¹⁴。この理論は、あらゆる秩序は深層に Implicate されていると説く。秩序は、そうした層から Explicate されて出現してくるのである。そして、そうした層から眺めれば、量子論のいかなるパラドクスも存在しておらず、量子論の様々なパラドクスは、時空間に現れた（時空間というスクリーンに映された）影による挙動にすぎなくなる。また、この理論は、標準的な理論の予測と寸分違わない結果を予測する。標準的な理論との根本的な違いは、直接的に認識不可能な層を仮定するという点だけである（少なくともそれが本質的な違いである）。

標準的なコペンハーゲン解釈は、そうした見えない、認識できない層などそもそも存在しないと考える。だが、これは科学の悪癖ではあるまいか？ 本当は見えない、認識できない層は存在しないのだろうか？ それどころか、世界の秩序は見えざる深層にまさしく Implicate されているというのが真相なのではなかろうか？ 少なくともそう考える方がわれわれの実感や漠然と抱いている世界観に近いのではないだろうか。

カント以来、時間と空間は、現象の入れ物のごとく解されてきた。しかし、この入れ物は、もはや科学の側面からもそして哲学の側面からも現象を入れるための十分な能力を有してはいないと言わざるを得ない。哲学を刷新するためにも、そして科学を刷新するためにも、ということは、その究極においては、新たな文明を模索するためにも入れ物たる時空間概念の刷新は行わなければならないのである。それが、時空間概念を哲学的に分析することによって行われるのか、それとも上記した量子論の代替え解釈から出現するのか、あるいはそれ以外の道程が必要なのか、現段階では分からない。そして、現段階において新しい確固たる時空間概念を提示するだけの体系的な哲学は筆者にはまだ芽生えていない。だが、フォーマットが刷新されると世界の見え方が変わることは確かである。

最後に時間と空間について、筆者の漠たる思索を若干ながら提示して結びとしたい。

かつて時間は円環を描いていた。この円環がやがて螺旋となり、さらにはキリスト教の世界観をなぞったかのように、創造され終末を迎えるがごとく直線へと変貌したと言われる。時間が直線と化してから、われわれの時間概念は基本的には何も変化していない。つまり、われわれの時間概念は、過去から未来へと延びる直線である。だが、この直線化が問題だったのではないか？ 本当は、深い層において Implicate されている時間は円環のごときのものであり、われわれはこれを直線に映しているだけなのではないか？ また、もし円環であれば一回転を単位とすることができ、直線であれば、どこまでも分割可能となり、単位を求めて幅のない数学的の点という瞬間に至ってしまうことは容易に想像できることである。その結果、大森が述べるように世界は消滅しかねないのである。

こうした事情は、空間についても言える。もちろん空間が円環を描いているわけではなからうが、われわれの抱く空間概念は、どこまでもフラットで均質なものである。だが、かつて空間はどこまでも（どこであっても）同質で均質なものではなかった。「ここ」と「あそこ」はあらゆる意味において質的に異なっていた。これがユークリッド型の数学的無機質でフラットな空間に置き換わったのである。しかし、空間は、そこに置かれた物、あるいは置かれるべき物によって本来は質的に異なっていた。われわれはそうした質的差異を捨象して、均一な平面にかかる実相を映しているのである。そしてまた、空間がユークリッド空間として均質化されてしまったことで幅のない表面（空間）というアポリアが必然的に出現し、またしても世界は消滅してしまいかねないのである。

われわれが当たり前と感じ取る時間と空間のリアリティーは、こうした一段、あるいは数段深い層に張り巡らされ、あるいは上記してきた語を用いるなら Implicate されているのではないだろうか。

ここで述べていることに概念の復古的な含意があることは否定しない。しかし、この直線たる時間が再び閉じられ、均質な空間がアーティフィシヤルな代物であることから解放されたとき、われわれは我々が時代のルネサンスを創造することができるのではないだろうか。復古とはすなわちルネサンスであり、ルネサンスとは復興であり復元であって、re-naissance、すなわち、再び生まれ出でることである。

かかる時空間概念から諸々の首尾一貫性を担保する可能性は探られてしかるべきであると思われる。

引用・参考文献

- 1 聖アウグスティヌス、『告白（下）』岩波文庫 服部英次郎 訳、1976、131頁
本文に記載したものは筆者による概要である（当該箇所を以下に記しておく）。

主よ、わたしはあなたにむかってまだ時間がなにものであるか知らないということを告白する。わたしはまた主よ、あなたに、わたしがこのようなことを時間のうちで語っていること、わたしがすでに時間について長い間語ったということ、しかも、この長いというのはただ時間的感覚によってのみ長いのであるということ、これらをわたしは知っている」と告白する。それではわたしは、時間がなにであるか知らないのにどのようにしてそのようなことを知るのか。それともわたしは、知っていることをどのように述べるべきかを知らないのであろうか。なにを知らないのかさえも知らないとは、わたしはあわれむべき人間である。
- 2 中島義道、「超越論的時間論——その予備的考察」、『カント読本』浜田義文 編、法政大学出版、1989、58頁
- 3 イマヌエル・カント、『純粹理性批判（上）』平凡社、原祐 訳、2005、169頁（A38 = B55）
- 4 John Michal Krois, *Cassirer—Symbolic Forms and History*, Chapter III, Yale University Press, 1987
- 5 J. McTaggart, *The Nature of Existence*, Cambridge University Press, 1927
記載した引用箇所は、同書の Book V, Chapter XXXIII, Section 304, p.9
- 6 中島義道、『時間を哲学する』、講談社現代新書、1997
Michael Dummett, *Truth and other enigmas*, Harvard University Press, 1978 / 藤田晋吾 訳『真理という謎』、勁草書房、1986
- 7 大森荘蔵と中島義道の対談、「過去は幻か」、『現代思想 特集＝＜時間論＞の現在』vol-21-03、青土社、1993
- 8 大森荘蔵の時間論については以下を参照にした。

- 『時間と自我』、青土社、1992
- 『時間と存在』、青土社、1994
- 『時は流れず』、青土社、1996
- 存在の意味「語り存在」、『岩波講座 宗教と科学〈3〉科学時代の神々』、岩波書店、1992
- 9 R. Morikawa, "Limit of the Cartesian Order", *Proceeding of the Alternative Natural Philosophy Association*, 25, pp.49~73, 2003
- 10 以下は、イマヌエル・カント、ibid. 167~168 頁 (A37~38 = B53~54) より。(一部に筆者による要約が施してある。)
- 11 D. H. Mellor, *Real Time II* Routledge, 1998
- 12 R. Morikawa, ibid.
- 13 エルンスト・カッシーラー、山本義隆 訳『現代物理学における決定論と非決定論』、学術書房、1994
- 14 ここでは、代表的なものを3点挙げておく。
- D. Bohm, "A Suggested Interpretation of the Quantum Theory in terms of "Hidden" Variables. I & II", *Phys. Rev. vol.85*, pp.166 ~ 179, 180 ~ 193, 1952
- D. Bohm, *Wholeness and the Implicate Order*, Routledge, 1982 / 井上忠 伊藤笏康 佐野正博 訳『全体性と内蔵秩序』、青土社、1996
- D. Bohm & B. J. Hiley, *The Undivided Universe : An Ontological Interpretation of Quantum Theory*, Routledge, 1993